

金衍洙（キム・ヨンス）「コンヤジャン図書館陰謀事件」論

——ボルヘス「バベルの図書館」との比較研究——

姜 惠 彬

はじめに

アルゼンチンの作家、ホルヘ・ルイス・ボルヘス文学の一つの軸は、テクストを無限に広がる宇宙として捉え、語りの可能性を示す一方で、語り得るものが、今現在においてすでに語り尽くされているという限界意識を繰り返し主題化する試みである。今までの人間の営為によって語られた一切の書物を所蔵した「バベルの図書館」（一九四一）という概念はその代表的な例であろう。ボルヘス文学は、語る行為と、言語を中心とした表現手段に関する考察を含意し、注釈という方法論へと派生していく。原典を有しないテクストに更に架空の注釈をつけるボルヘスの作業は、フィクションに対するフィクションの創出として、二〇世紀以降の文学において絶えず再考されてきた間テクストの問題と連動している。ウンベルト・エコは、ボルヘス文学が、「言語学的な語源のみならずまさしく概念を無限に組み合わせる中で、それらの原子を永遠に回して再構成する」と述べている。^①更に、ボルヘスの文学がポストモダンズムの間テクストの形式を先取りし、「ある本

が別の本について語るだけではなく、ある本の内部から別の本へと貫通することができる」ハイパーテクストの形式を有すると指摘する。

一九二〇年を前後に、スペインを中心に起こった前衛運動であるウルトラリスモに関わりながら展開されたボルヘスの実験的文学活動は、現代においても絶えず問い直されている。本稿は中でも、韓国の現代作家であるキム・ヨンスの文学における、ボルヘス文学の受容様相を明らかにすることを目的としている。九〇年代、韓国のポストモダンズムの中で活動を始めたキム・ヨンスは、語る行為と文学の方法論に関する作品を継続的に発表してきた。本稿では「バベルの図書館」のオマージュとして書かれた「コンヤジャン図書館陰謀事件」^②を中心に、キム・ヨンス文学における語りの問題の内実を探る。従来の研究において、本作は後に発表されるキム・ヨンスの代表作と関連して部分的に論じられることが多かった。本稿では、作品全体の読みを通じて、本作で提示される小説作法におけるボルヘス文学受容の様相を考察する。

一、扇風機と希少本の「幽閉」

本作は、「あなたが持っている扇風機を買い取りたいと思います」と語る一人の男が「私」を訪れる場面から始まる。突然現れた、かつて扇風機の開発者であり、今は自分が開発した扇風機を探し「幽閉」しようとしている男に出会い、小説家の「私」は扇風機の収集家をテーマとした作品を書くことを決める。そして、資料収集のために、国内で最も多くの本を所蔵しているコンヤジャンの図書館を訪れ、図書館の設立とともに、希少本を「幽閉」しようと試みるコンヤジャンに出会うことになる。このように、本作は、小説を書く「私」と扇風機を作る男、そして希少本を集めるコンヤジャンの、創作物をめぐる欲望を軸に展開されていく。

「私」はスランプに陥っているようで、「ものを書こうとすると、前に読んだ小説と似たものになるし、良いアイデアが思い浮かぶと、他の小説が連想されてしまう」という。「時間が経てば経つほど、新しい小説を書く確率も減っていく」とあるように、「私」の悩みは、新しい作品を創作することへの困難を訴えるもので、本作が、テキストと先行テキストとの関係、つまり間テキストの問題を内包していることを示す。この問題は、語る主体の特権性を問い直し、語られるものと語る主体の関係を恣意的なものとして見做そうとする、二〇世紀以降の文学史の流れを組むものである。

創作に苦しむ「私」と同様、絶えず新しい扇風機を発明してきた男も同じ悩みを抱えている。男は数多くの種類の扇風機を構想した人物

である。それは「扇風機を実用的な家電製品としか考えない人たちの偏見に立ち向かうため」であったが、新しい扇風機の開発に挑んで一〇年が経ったある日、「頭の中で何かがぶつんと切れ」、「無」が訪れたという。その理由を男は次のように説明している。

時間が経つにつれて、私は必死になって変わった形の扇風機を作ることに努めました。だんだん作れる扇風機の種類は減っていき、ついには何一つ、新しい扇風機を作ることができなくなっていました。もちろん、自分の個人的な、想像力の枯渇かもしれません。しかし、同時に、扇風機が持つ可能性もお枯渇しました。二度と、そんな愚かなことはしません。それは扇風機が死んで、自分も死ぬことから。

男は、ラジオの機能が搭載されたモデルの扇風機を探し「幽閉」するために「私」を訪れる。そして、新しいものの創作が、結局は可能性の枯渇をもたらし、それが対象の死であると同時に、創作者としての自分の死を意味するという自覚をもって、男は小説家の「私」にも同じような忠告をしている。それは、「不朽の小説を書くこと」が、その後の小説家の「存在意義」を無化するという認識に基づいている。かかるテキストの可能性をめぐる「私」の葛藤は、希少本を「幽閉」しようとする図書館長のコンヤジャンの試みとも類似している。コンヤジャンの意図について、男は宝くじを例に挙げ、次のように説明する。

一万枚中、当たりが一枚だけ入っているとします。当選番号が発表されない限り、すべての宝くじの当選確率は一万分の一ということになりますね。希少本も同じです。コンヤジャン先生のように希少本を収集する人には、いまだに発見されていない本があるからこそ、自分の存在意義が生じるわけです。

希少本の存在価値は、まだ発見されていない本の存在によって付与される。このロジックは図書館長だけでなく、創作に携わる二人にも当てはまるものである。存在しないものが、存在するものを立証するという構図は、不朽の小説を書かないことで、小説家としての存在価値を持ち得るという、「私」の創作における矛盾と、すべての希少本を無くしてしまうことによって、収集家としての自分の存在を永遠に残そうとするコンヤジャンの試みとも重なる。

このような、存在と可能性に関する認識は、「私」と友人が訪れた飲み屋での事件においてすでに提示され、それが確率の問題を中心に語られるのは興味深い。不思議な男の訪問があった日、友人と飲み屋を訪れた「私」は、お店の男からサイコロを二つ渡される。彼が差し出す紙には、サイコロを振って同じ数字が出てくる度にサービスメニューが提供されると書かれており、例えば二つの一が出ると生ビールを一杯、二つの六が出るとそのお店の一押しのおつまみをただで食べられるという。当たる確率について質問した「私」に、お店の男は、六回振ってもらうと一回はサービスが出るという、三六回振ると一回は一押しのおつまみが当たると答える。お店としてはある程度予測可能な範囲で商売するしかなく、しかもその予想はほとんど外れないと

いうのである。しかし、当然、お店にとっての確立はお客一人一人の確立とは合致し得ない。当選される確率が百パーセントでないにも関わらず宝くじを買う人々と同じく、二人は六分の一の確率をもってサイコロを振ろうとする。そして、この事実は、男が例に挙げた宝くじの話を想起させる。つまり、当選番号が発表される以前、すべての宝くじが当選の可能性を有するのと同じように、二人に与えられたサイコロを振るチャンスも、一押しのサービスメニューに当たる可能性を持つのである。

重要なことは、予測に反して、二人がまったく偶然の事件でサービスメニューを提供されるという点である。サービスは、酔っ払ったお客の一人が友人に抱きつき、それに激怒した友人に対するお店側の謝罪の代償として提供される。このエピソードは、サイコロを振ることで生じる確率によって守られていたお店のルールが、唐突な事件で無化されてしまう可能性を物語っており、確率を持つ偶然性を示している。この事実はコンヤジャンの意図とも連動している。当選されない可能性によって当選の可能性が生じ、しかもその可能性は確率という偶然に左右されていた。同じく、コンヤジャンが希少本を手に入れる可能性は、まだ発見されていない無数の希少本によって担保され、彼がある本に出合うことは、偶然性に満ちた混沌の中で行われているといえる。

二、「コンヤジャンの図書館と」「バベルの図書館」

本作が提示する、読み手とテキストの關係に認められる偶然性は、コンヤジャン図書館のモチーフそのものでもある。コンヤジャンは、自分が「ボルヘスとほぼ同時期に、完璧な図書館を作る方法を考案した」と主張しており、その話を聞いた「私」は「記憶の名手フネスのように、ボルヘスが書いたその完璧な図書館に関する小説を思い出す。ここに、「世界が始まって以来、あらゆる人間が持ったものはるかに超える記憶」を持つ人物が登場する「記憶の人、フネス」（一九四四）と、前述した「バベルの図書館」が参照されていることは明らかであろう。「記憶の人、フネス」における記憶という装置は、コンヤジャンが図書館を運営する上で重要な概念となっている。彼は司書たちとの紛争を避けるために短期記憶喪失を演じ、圖書の位置情報をデータ化することを拒否しており、それは「図書館の本は膨張を待っている生地のようなもの」であるという信念に基づいているという。本は図書カードで分類されるのではなく、彼の「心の中の図書館」に沿って納められる。音や色、味、匂い、触感といった五感によって変換され、羅列される図書は、図書目録で数値化されることを拒み、コンヤジャン自身の過去の記憶と有機的につながる形で、連続的に膨張していく。

このような膨張し続ける図書館というモチーフは「バベルの図書館」と接点を有する。ボルヘスの「バベルの図書館」は「宇宙」の同義語として、「永遠を超えて」存在する。その空間の真ん中には換気孔が

あり、「不定数の、おそらく無限数の六角形の回廊」で成り立っているという。また、六角の各壁には五つの書棚が配置され、本棚には同じ体裁の三二冊の本が納まっている。それぞれの本は四〇〇ページからなり、各ページは四〇行、各行は約八〇の活字からなる。作中には、バベルの図書館の正体を理解し、言語化しようとする試みが語られ、ある「司書」は「広大な図書館に、おなじ本は二冊ない」という事実を発見したとされる。

彼はこの反論の余地のない前提から、図書館は全体的なもので、その書棚は二十数個の記号のあらゆる可能な組み合わせ——その数は極めて膨大であるが無限ではない——を、換言すれば、あらゆる言語で表現可能なもののいっさいをふくんでいると推論した。いっさいとは、未来の詳細な歴史、熾天使らの自伝、図書館の信頼すべきカタログ、何千何万もの虚偽のカタログ、これらのカタログの虚偽性の証明、真実のカタログの虚偽性の証明、バシリデスのグノーシス派の福音書、この福音書の注解、この福音書の注解の注解、あなたの死の真実の記述、それぞれの本のあらゆる言語への翻訳、それぞれの本のあらゆる本のなかへの挿入などである。

バベルの図書館の体制は一見、無欠で全能に見えるが、「いっさいがすでに書かれているという確信は、われわれを無に、あるいは幻に化してしまう」とあるように、完全を約束するものではない。その原因には二つが考えられる。まず、膨大な書物の存在においてその原典

を探すことが困難である点、そして、すべてが無秩序に配置され、一冊にまとまった書物の位置を特定できないという問題である。清水徹は、本作が提示した図書館という空間が、「本の相互の全関係を含む空間」であるとし、問題は、特定の作品を、かつてのすべての本が納められた巨大な空間の中で見出すことの困難さであると指摘している⁽⁴⁾。また、平野啓一郎は、ボルヘスの世界観の基底に「何事かの事物、何事かの出来事は、いずれも無限の可能性、無限のパターンの中のある一通りである」という認識を見出し、「無限とも思える音の組み合わせの中からある言葉が誕生し、そこからある思想なり、詩なりが誕生する」ことの困難さが、本作のもう一つのテーマであると指摘している⁽⁵⁾。

このような、「バベルの図書館」が示すテキストの特質は、主にポストモダンニズムの流れの中で理解されてきた。大西亮は、本作が「『作者性』の消失を軸とする文学空間」を形象化したもので、「物語性を切り捨てて過剰な手法的実験に走ったフランスのヌーヴォー・ロマンを生んだ二十世紀文学のありようを見事に予告、あるいは要約した作品」であるとしている⁽⁶⁾。また、前掲の清水の論が、ボルヘスの作品に「自己表現なるものをめざす19世紀以降の文学観のいきづまり」を修正するという意義を認めるように、ボルヘス文学がモダンニズム以降における、語る行為への考察を受け継ぎ、ポストモダンニズムの諸問題を取っけりにしていることはよく指摘される通りである。

一方、ボルヘス文学が間テキスト性の問題を内包するとなると、そこからは、すべてが語られてしまった時、文学には何ができるか、という問題に向き合わざるをえなくなる。キム・ヨンスの「コンヤジャ

ン図書館陰謀事件」は、かかる問題意識を含意した一つの方法論として書かれており、その中心にはハイパーテキストの概念がある。

三、ハイパーテキスト

「コンヤジャン図書館陰謀事件」において、読み手とテキストとの出会いは、まったくの偶然に満ちた、混沌の世界において行われると述べたが、更にそのテキストは原典を有していない点が強調されている。この事実は、扇風機収集家の資料探しにコンヤジャンの図書館を訪れた「私」と司書とのやり取りの中で示され、そこにもボルヘスが参照されている。

膨大な図書を前に、「私」が扇風機収集家の本について質問すると、司書は扇風機収集家という職業が実在するかどうかをまず問い、存在しないものを扱う書物は存在し得ないと主張する。それに対して、「私」はボルヘスの『幻獣辞典』(一九六七)を例にして反論しようとするが、うまくいかない。『幻獣辞典』が、実在しない想像の動物を扱っており、各章にその出典を明記している一方、その原典は現在にも発見されていないことを想起する必要がある。司書が語るように、そのような原典を探す行為は無限に続くもので、「バベルの図書館」においても、その行為を繰り返すうちに、人々は人生を浪費してしまうことが予測されている。司書の説明は次のように続く。

おそらく、ボルヘスはきつと聖アウグスティヌスが神の存在を証明した方法に大きく影響されたはずです。Aという本に載った話

の出所はBにあり、Bに載った話の出所はCにあります。このようにすることが絶えず繰り返されるとして、あなたははたしてその原典を探ることができると思えますか？本に関する本は絶えず循環します。そういう本を我々はハイパーテキストと呼びます。テキストと言えるものは、現実に関する本だけです。テキストは循環しません。

この箇所は、「バベルの図書館」の次の個所が参照されているはずだ。

本Aの所在を突き止めるため、あらかじめ、Aの位置を示す本Bにあたってみる。本Bの所在を突き止めるために、あらかじめ本Cにあたってみる。この調子で無限に続けるのだ……。その種の冒険のために、わたしも生涯を浪費してしまった。

ボルヘス文学における、原典を有しないテキストの問題は、ハイパーテキストに関連して論じられることが多い。元々、ハイパーテキストは、「コンピュータを利用したアクセスとリンクの新たな可能性を持つ電子テキストを指す造語」であつたが、間テキストや創造的読者といった現代の批評理論において広く使われている。一九四五年、ヴァネヴァー・ブッシュが、個人の資料や記憶を保存し、自由に参照可能な装置であるメモックスの概念を提案して以来、テッド・ネルソンがブッシュの概念を発展させ提案したのがハイパーテキストの概念である。ネルソンは、ハイパーテキストを「順序通りに書かなくてもよい文章、つまりひとつの文章がいくつかに分かれていて、対話的な画面

上で読者が読みたいところを自由に選択できるようにもの」と定義している⁽⁸⁾。ハイパーは「超越した」という意味で、桂英史によると、かかる「超越したテキスト」あるいは「普遍化されたテキスト」は、「機能的には文字や画像などを有機的に統合した文書で、必要な情報との間に自由に関係を定義していく考え方」を基礎としている⁽⁹⁾。

文学の領域におけるハイパーテキストの意義は、最初から最後に向けて一方的に進行する線形的エクリチュールから、複数の読みの可能性が確保される非線形的エクリチュールへの移行をもたらした点にある。この事実が、「開かれた」テキストと、能動的で創造的な読者の登場といった、ポストモダンニズムの理論の多くを含意している。

かかるハイパーテキスト性を内包した作品にボルヘスの「八岐の園」⁽¹⁰⁾がある。「八岐の園」は、表面的なプロットの進行中に、もう一つのプロットが挿入される錯綜した構図を持っている。まず、本作は、第一次世界大戦を背景に、青島大学の元英語教師でドイツのスパイである兪存（ユソン）博士が、英国砲兵隊の厳しい監視網を避け、ステイブン・アルバートという中国学者を殺害する過程を追っている。殺害した人の名前は、ドイツ軍が攻撃しなければならぬ都市のヒントとなっており、殺害事件が新聞で報道されることでドイツ軍は兪存の意図を理解し、逮捕された兪存は処刑される。一方、本作にはもう一つのプロットが進行しており、ステイブン・アルバートと兪存の間で交わされる、兪存の先祖、崔奔（サイペン）の小説と迷路に関するエピソードがそれである。崔奔は、生まれ故郷の州の知事で、あらゆる学問に通じた名高い詩人であったが、そのすべてを捨て、一冊の本と迷路を作ることに没頭した人物である。一部が翻訳発表された崔奔の

本は、第三章で死んだはずの主人公が第四章で生きているといった逸脱した時間軸を有し、「最後のページが最初のページと同一で、限りなく継続する可能性を持った本」である。チョン・ドンソブは、本作において「中心的ストーリー」が存在せず、「多様な未来と多様な時間が無限に分かれ増殖する」と指摘し、ハイパーテキストの特徴である「拡張性」と「多中心性」を本作に見出す。⁽¹¹⁾そして「無数の時間の集合、無数の事件が存在する迷路」という概念が、無数のリンクで繋がるハイパーテキストを想起させるとし、ハイパーテキストとボルヘス文学の接点を注釈に認める。ネット上でクリックとリンクの機能を通じて他のテキストへアプローチするのと同様、ボルヘスの作品は、注釈を通じて無数のテキストとつながっていると見ることもできよう。⁽¹²⁾

「コンヤジャン図書館陰謀事件」において、「私」と司書の対話の中で登場したハイパーテキストの概念は、新たに書かれるテキストと先行テキストとの関連性に向けられていた。この問題は、もちろん、小説家の「私」の創作の態度と連携している。末尾において、コンヤジャンの希少本を手に入れようとした司書がコンヤジャンを殺害する事件が発生し、二人の間の暗闘をめぐる「コンヤジャン図書館陰謀事件」の真相が明かされる。事件を知った友人は「私」に、「当選番号がまだ発表されていない時の宝くじ」の魅力を語り、「永遠に当選番号が発表されないこと」こそ、コンヤジャンの希望であったと推測する。そして、結局、扇風機収集家に関する本を入手できなかった「私」が、もし、その本が存在するなら、それよりもっと上手く書ける自信がないと語ると、友人は次のように答える。

結局、存在しない本がお前の競争相手ということだね。名作を書いたとしても確認のしようがないし。結局、小説家とは、読むすべもない偉大な本よりも良いものを書かなければならない者たちだね。

原典を確認できない膨大なハイパーテキストを前に、扇風機収集家に関する本はオリジナルのテキストとはなり得ず、その意味で、「私」の競争相手は、「存在しない本」ということになる。また、小説家として不朽の名作を書けたとしても、創作を続ける「私」にとって、これから書くものが名作かどうかを確認するすべはない。自らが創作した、もしくは今後、創作していくテキストは、もはや原典を有しないハイパーテキストの一つとなり、作者は、確認不可能な名作を目指し書き続けるしかない。

おわりに

キム・ヨンスは、このような書く行為に対する限界意識を「原典探しの小説」という方法論へと転換させており、長編『グッドバイ李箱』⁽¹³⁾はその代表作として評価される。本作は、一九二〇年生まれで、日本と韓国で活動したモダニズム詩人李箱の、遺失されたデッドマスクと未刊行原稿を探そうとする人物たちを描いたものである。本作は、発見されないデッドマスクの所在を探し続ける記者キム・ヨン、李箱の生涯を追いかけて、自らが李箱の影となってしまう研究者ソ・ヒョクミン、アメリカで比較文学を専攻し、李箱の連作詩「鳥観図」を研究

するピーター・ジューを通じて、本物と偽物の境界線は何か、原典とは何かという問題を問いかけている。かかる試みは、韓国内で「原本探しとしての小説」という新たなジャンルを切り開いたと評価され、そこにボルヘス受容の痕跡を認める論考も多い。ハム・ジョンイムは、『グッドバイ李箱』が「コンヤジャン」の最後の叙述の延長線上で書かれたものであるとし、本作をボルヘスの「ハーバート・クエインの作品の検討」（一九四二）と「ピエール・メナール」、「ドン・キホーテ」の著者」（一九三九）のような、「原本をめぐる偽の伝記形式を本格的に借用した作品」であるとしている⁽¹⁴⁾。ハムが指摘するように、キム・ヨンスの方法は、「本を素材にした第2次テクストの生産」の場を設ける結果となった。また、ファン・スヒョンは、キム・ヨンスがボルヘスの「疑似リアリズム (pseudo-realism)」を継承しているとし、同じく『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール』との関連性を述べている⁽¹⁵⁾。ファンは、原典をめぐる考察が、最終的には読書行為に置き換えられ、読書とは「再創作の過程の一つ」であることを検証することと連動していると指摘する。

ポストモダニズムは、「民族文学」の領域が豊かに展開され、文学における歴史性が求められてきた韓国文壇においては、従来のリアリズムとの断絶という危機意識を常に孕んでいた。キム・ヨンスの文学はかかる文壇の問題意識と、新たな小説作法の模索の間で展開されている。その模索は、ボルヘス文学と接点を有し、ポストモダニズムの限界を克服しようとする後の代表作とも連動している。

注

- 1 ウンベルト・エコ「ラ・マンチャとバベルの間」(林直美訳、『ユリイカ』一九九九) 未邦訳。【原題】『공작 도서관 음모 사건』(『조무살』二〇〇〇・三、문학동네 所収)
- 2 ボルヘス作品の引用はすべて岩波書店『伝奇集』(一九九三・一一)に拠る。
- 3 清水徹「ひとつのボルヘス入門」(『イベロアメリカ研究』五一、一九八三・四)
- 4 平野啓一郎「ボルヘスと「現在」」(『すばる』二六・九、二〇〇四・九)
- 5 大西亮「無限の図書館と文学の伝統——ボルヘスの作品にみる〈作者性〉の消失——」(『異文化・論文編』二二、二〇二〇・四)
- 6 川口喬一・岡本靖正編『最新文学批評用語辞典』(一九九八・八、研究社出版) 参照
- 7 テッド・ネルソン『リテラリーマシン ハイパーテキスト原論』(竹内郁雄・斎藤康己監訳、一九九四・一〇、アスキー) 四二頁
- 8 桂英史「ハイパーテキストなど存在しない」(小森陽一・富山太佳夫・沼野充義・兵藤裕己・松浦寿輝編『テキストとは何か 岩波講座文学』二〇〇三・五、岩波書店 所収) 二八六頁
- 9 一九四一年一二月に発表された短編集『八岐の園』に収録された短編「八岐の園」を指す。
- 10 チョン・ドンソプ「ボルヘス作品に現れたハイパーテキスト性——「八岐の園」と「ハーバート・クエイン」の作品の検討」を中心に——(『世界文学比較研究』一七、二〇〇六・一一)
- 11 木股知史「ハイパーテキストと文学研究」(『日本文学』五七・一、二〇〇八・一)は、テクストにおける注釈の課題について「線的なテクストができあがる過程における複雑なテクストの絡まり合いを復元してみせる」ことであると指摘している。
- 12 未邦訳。【原題】『공작 이야기』二〇〇一・一、문학동네
- 13 ハム・ジョンイム「21世紀韓国小説のラテンアメリカ小説の傾向——ファン・ソクヨン、イム・チョルウ、キム・ヨンス、パク・ヒョンソの小説を中心に——」(『比較文化研究』二五、二〇一一・一〇)
- 14 ファン・スヒョン「韓国文学とボルヘス式創作——九〇年代以降の韓国文壇におけるボルヘス受容現況を中心に——」(『世界文学比較研究』四五、二〇一三・一二)